

氏名(本籍)	にのみや たか し 二ノ宮 崇 司 (愛知県)
学位の種類	博士(言語学)
学位記番号	博乙第2622号
学位授与年月日	平成24年12月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	ジッバーリ語のプロソディーに関する音響音声学的記述

主査	筑波大学教授	Ph.D.(言語学)	池田 潤
副査	筑波大学准教授	博士(文学)	白山 利信
副査	筑波大学准教授	文学博士	金 仁和
副査	筑波大学准教授	博士(言語学)	那須 昭夫
副査	筑波大学助教	博士(言語学)	宇都木 昭

論文の内容の要旨

ジッバーリ語はオマーン国西部のズファール行政区で話される言語で、系統的にはセム語族に属する。音韻的にアッカド語やアラビア語より古い特徴を保持するため、セム語の音韻史を語る上で非常に重要な言語であるが、ジッバーリ語の先行研究には不明な点が少なくない。とくに本研究で取り扱う単語レベルのプロソディーの記述には問題が多く、その結果、ジッバーリ語のデータを比較セム語学において十分生かし切れていない現状がある。そこで著者は2008年と2010年にオマーンでフィールドワークをおこない、ジッバーリ語の音声の実体を調査してきた。その際に得た録音データを音響音声学的手法によって解析し、ジッバーリ語における単語レベルのプロソディー（とくに高さ、長さ、強さ）を記述するとともに、音声学的に意味のあるパタンを可能な限り抽出することが本論文の目的である。

本論文で言うところの「音声学的に意味のあるパタン」とは純粋なマイクロプロソディー以外のものであり、マクロプロソディー、マクロプロソディーとマイクロプロソディーの中間的な現象を指す。マイクロプロソディーは微細で、知覚できないものである。例えば、taとdaを発音した場合、母音の基本周波数はtに後続する母音の方が高いが、これは聴き取れないほど微細な違いである。それに対しマクロプロソディーは知覚できるものである。マクロプロソディーとマイクロプロソディーの中間的な現象とは子音の違いがありながら、知覚できるものである。例えば韓国語における、喉頭化音と無声無気音の違い、デンマーク語におけるstødと非stødの違いがそうである。ジッバーリ語には韓国語の喉頭化音と同様、喉頭に緊張をもたらす放出音がある。また中野(1998)はジッバーリ語に「一種のstød tone」があると指摘している。ここからジッバーリ語のパタンにはマクロプロソディーだけでなく、マクロとマイクロの中間的な現象も含んでいる可能性がある。

本論文は5つの章によって構成される。第1章は序論であり、ジッバーリ語の地理、系統などの概説をおこなった上で、先行研究によるジッバーリ語の音韻体系とその問題点を示す。これによると問題点は2つある。第1にT. M. Johnstoneの*Jibbālī lexicon* (New York: Oxford University Press, 1981)のストレス記号に関わる問題である。Johnstoneはストレス記号が2つ付されるVVという表記と母音の上に何の記号も付されな

い1音節語のVという表記を認めている。しかし、Johnstoneはストレス記号を使用している点から、ジッバーリ語をストレスアクセントの言語と見做しているといえる。ジッバーリ語がそうであるとすると、VV また V の音声的実体は定かでない。第2の問題は中野暁雄の *Comparative vocabulary of southern Arabic: Mahri, Gibbali and Soqotri* (Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, 1986) の喉頭化記号 (°) である。中野は喉頭化記号を超分節音的なものであると説明しているが、そのプロソディーの実体について何も言及していない。上記の問題は、ジッバーリ語のプロソディーの記述が不十分であることを示している。これをふまえて研究目的が設定され、研究方法が説明される。

第2章では、放出音が後続母音の基本周波数に影響を与えるか否かを検討する。例えば、韓国語の喉頭化音は後続母音の基本周波数に大きな影響を与えることが知られ、喉頭化音を含む単語と非喉頭化音を含む単語とでは高さのボタンが変わってくる。放出音も喉頭に大きな緊張をもたらす音であるため、喉頭化音のように後続母音の基本周波数に大きな影響を与える可能性がある。その場合、放出音を含む単語の高さのボタンと非放出音を含む単語の高さのボタンを同一視することはできず、両者を分ける必要がある。基礎実験(放出音と非放出音でミニマルペアではない例を使用)と本実験(放出音と非放出音でミニマルペアとなる例を使用)の結果、ジッバーリ語の放出音が後続母音の基本周波数に及ぼす固有の影響はみられなかった。したがって、放出音を含む単語のボタンと非放出音を含む単語のボタンを分けて記述する必要はないと考えられる。

第3章では2音節語の基本周波数、インテンシティー、時間長をクラスター分析し、そこから得られたグループを検討し、結果として①第1音節に卓立があるボタン、②L+R/Hボタン、③H/L+Fボタン(Lは低、Rは上昇、Hは高、Fは下降を示す)の3つが存在することを究明する。①は第1音節が第2音節より高く、かつ強いボタンである。②は第1音節よりも第2音節の方が高く、第2音節が喉頭化によって下降しないボタンである。③は第2音節が下降するボタンである。L+R/Hボタンは「短母音+短母音」と「長母音+短母音」、H/L+Fボタンは「短母音+短母音」と「長母音+短母音」「短母音+長母音」に下位分類される。さらに、基本周波数とインテンシティーが部分的に連動していることも明らかにされる。

第4章では1音節語の基本周波数と時間長をクラスター分析した上で、各グループの特徴を吟味し、結果として2種類のボタンが存在することを突き止める。ひとつは下降しない特徴を示すHボタンで、もうひとつは下降する特徴をもつFボタンである。Hボタンは喉頭化を伴っており、Fボタンは長母音と短母音に下位分類される。

第5章は結論である。第1章～第4章の内容を簡潔に要約した上で、2音節語と1音節語に共通する特徴をまとめている。まず、2音節語と1音節語の両方に下降ボタン(1音節語、2音節語ともにF)と非下降ボタン(1音節語H、2音節語R/H)が存在し、非下降は短母音のみで起きるという事実を指摘する。また、中野(前掲書)に用いられる喉頭化記号(°)について、中野は「一種のstød tone」であると指摘しているが、2音節語においても1音節語においてもジッバーリ語の喉頭化は大きく下降するデンマーク語のstødとは異なることを指摘する。その上で、残された課題と今後の展望を示している。

審査の結果の要旨

本論文は、これまで不明な点が多かったジッバーリ語のプロソディーに関していくつかの重要な発見をもたらした点で、セム語学および言語学一般に対して固有の貢献を果たす貴重な記述的研究であると言える。本研究に関して特筆すべき点は次の3つである。まず、オマーン国西部のズファール行政区で自らインフォーマントを探して現地調査を実施し、ジッバーリ語音声資料を収集した点である。自立的な行動力と実証的な研究姿勢は記述言語学者として必須の資質であるが、本論文を通して著者がこれらの資質を高いレベルで備

えていることがうかがえる。次に、音響解析に耐える高音質の録音を行い、ジッパーリ語のプロソディーを実験音声学的手法によって客観的に記述した点が特筆に値する。本論文に収録された大量の解析データはジッパーリ語音声学・音韻論の基礎データとして活用され、今後多くの研究者によって参照、引用されることになる。さらに、本論文が探索的な手段としてクラスター分析を援用した点も重要である。上述の通り、ジッパーリ語のプロソディーについては不明な点が多く、前提となる有力な知見や仮説が存在しない。そのため、本論文は探索型の研究とならざるを得ないが、統計的な手法を活用して音声学的に意味のあるパタンの抽出に成功した点は評価に値する。

ただし、本論文に問題点がないわけではない。まず、本論文は1名のインフォーマントから収集したデータに立脚している。探索型の研究としては十分価値があるが、次の段階として、ここで得られたプロソディーのパターンが他の話者のデータにおいても再現するかどうかを検証する必要がある。また、分析資料の選択に際しては、マイクロプロソディーを細心にコントロールする必要がある。すなわち微細な子音の影響を排除し、母音の内在的特性をふまえて母音が持つ影響も取り除くことにより、より精緻な分析を行うことが望まれる。

しかし、上記の問題点はいずれも著者自身によって今後の課題として自覚的に受け止められており、本論文の学術的価値を損なうものではない。

平成24年10月17日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。なお、学力の確認は、著者が「人文社会科学研究科論文審査等実施細則」第10条(1)に該当することから免除し、審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

よって著者は、博士(言語学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。